

日本ミツバチがいる自然環境を!

企業組合ハニーBee 養蜂事業の取り組みから

古来より日本に生息する日本ミツバチはとても環境に敏感です。近年農薬などの影響から極端に減りつつあります。蜂蜜が多く採取できるセイヨウミツバチの養蜂が主流のなか、日本ミツバチの養蜂は数が少ないことも知られています。

武蔵野の台地と言われる三富新田は、落ち葉をたい肥にする循環型農業を実践している地域、その地域で養蜂業を試みた企業組合ワーカーズ・コレクティブハニーBee の養蜂事業から見える自然環境と蜂の世界、自然環境と日本ミツバチの生態、採蜜について紹介します。



環境に敏感な日本ミツバチ

日本ミツバチは、5千~2万匹で群れを成し1キロから2キロ移動します。

体が小さく、セイヨウミツバチとの区別はわかりやすく、働き蜂は全体的に黒っぽく、比較的おとなしく滅多に刺しません。環境の変化や刺激にも敏感で逃げてしまうこともあります。巣箱が空になることもあります。農薬など生きていけない環境から逃げて、暮らしやすい場を求めます。ハニーBee が設置している巣箱も空になったことがあります。

また、日本ミツバチは、プロポリスを作らないようです。

効率の良い セイヨウミツバチ

国内多くの地域で生息するセイヨウミツバチは、巣箱から逃げない性質があります。一か所にとどまる性質を利用し、プロポリスが採取でき、採蜜の収量も多く国内各地で育成され養蜂が行われています。

日頃街で見かける蜂蜜は、多くがセイヨウミツバチの蜂蜜です。



残したい三富新田



落ち葉は三富の森の恵み



コナラ・クヌギ・エゴなどの樹木が茂り、秋には落ち葉が地面を埋め尽くす武蔵野の大地と呼ばれる三富新田は、落ち葉をたい肥にする循環型農業を実践している地域です。「一反の畑に一反のヤマ」と言われるよう、よい作物をつくるために平地林からの恵みの落ち葉を土づくりに生かす農業が、昔から三芳町で行われてきました。

近年、地主の高齢化などで土地を手放す人や手入れが行き届かず下草を刈り取ることもできない状態になっている場所もあり、保存のため地域の人々による落ち葉はきなどが行われています。ハニーBee の養蜂は、この自然を守ることにもつながっています。最近では、巣箱の隣で畑作をする農家さんが、「蜂、飼っているんだもんね」と農薬の散布を控えてくれていて、地域の理解も進んでいます。